

# マサリクとフッサーの思想的交錯 パトチカ論考のパースペクティブ

西角純志

## I. 序

「ベルリンの壁」崩壊から10年がたった。中央ヨーロッパには如何なる思想的な変化があるのであろうか。今日ではソ連・東欧社会主義の崩壊をもって「近代の終焉」とする見方が支配的である。「近代」という「大きな物語」が終焉しようとしているなかで、中央ヨーロッパに「小さな物語」がはじまろうとしている。それはひとつの思想の萌芽である。そしてこの物語は、中央ヨーロッパの小さな国として知られるチェコスロヴァキアの建国の父T. G. マサリクの思想の再評価の動きと重なっている。<sup>1)</sup>

マサリクは、チェコスロヴァキアの政治家のみならず、哲学者、社会学者として、早くから名声を得ていた。マサリクは、ウィーン大学に学び、フランツ・ブレンターノから大きな影響を受け、その後、ライプツィヒにおいて、後の現象学者フッサーとも親交をもった。フッサーは、当時、18歳で、主として数学に関心があり、他方、マサリクは、当時27歳で、すでに博士号をもっていた。マサリクとフッサーの最初の出会いは定かではないが、1876-7年当時、ライプツィヒでは、ツイルナーやブントの講義が行われており、2人の出会いは大学のレクチャーホールにはじまるものと思われる。「私は、マサリクと一緒に哲学の講義に参加しましたが、当時それは、私の教養のためばかりではなく、1つの分野としてもありました。マサリクは、ドクターとして当然私より遙かに抜き出ており、未熟な私を助け、物事を理解し自立した考え方へと筋道を指し示してくれました<sup>2)</sup>」。哲学研究の上でマサリクがいつもフッサーに勧めたのは、初学者として近世哲学に始まり、デカルト、イギリス経験論、ライプニッツから出発することであった。これらは事実、フッサーにとって後々までも糧となつたものである。

マサリクとフッサーは、互いに大学ばかりではなくて、ライプツィヒでの会合「学術哲学協会」でも会った。この会合は、リヒャルト・アベナリウスとカール・ゲーリングの強い影響下にあり、会合のなかでは実証主義的な考え方が支配的な雰囲気であった。フッサーとマサリクは、モラヴィア出身ということで、すぐに仲よくなり、トランシルバニア系ザクソン人の神学学生会にも出入りしていた。この頃マサリクは、フッサーにブレンターノに対する関心を換気させ自分と一緒にウィーンのブレンターノのもとにいくように勧めた。

マサリクはライプツィヒを去る時には、講義台を残し、フッサーはその講義台を譲ってくれるようにマサリクに頼んだ。フッサーはその時、ライプツィヒから出ていたので、マサリクはゲーリングの母親の家にこの小さな家具を残すことになった。そして、マサリクは、その家具をとりに行くよう手紙を書いたのであった。

1877年8月にはマサリクは、ウィーンに戻り、ギムナジウムで働きながら教授資格論文

の研究を続けた。そして2年後には、ウィーン大学の私講師になった。他方、フッサーは、1877年12月頃俄然数学に熱中するようになり、ライプツィヒ大学を退学し、憧れの数学者のいるベルリン行きを決意した。そして1878年から81年の6学期までフッサーは、ベルリン大学で数学と哲学を研究することになった。フッサーのベルリン滞在中にマサリクは4通の手紙を書いた。<sup>3)</sup> なかでも教授資格申請論文『現代文明の大量現象としての自殺』に関連した問題を扱ったやりとりが興味深い。この本は1881年ウィーンで公刊されたが、それはフッサーが、ウィーンに到着する数日前であったという。

マサリクとフッサーは、ウィーンでは共に親密な個人的接触をとっていた。フッサーは、マサリク邸の常連客であったし、マサリクのもとで『新約聖書』を研究した。1919年9月4日付けのアルノルト・メッツィガーの手紙では、フッサーはマサリクを引き合いには出しているが「ウィーン時代の新約聖書の〈強烈な感銘〉は、ついには厳密な哲学の手助けに、神への道、真の人生を見つける励みになった<sup>4)</sup>」、と語っている。フッサーは、13才の頃神の存在に関する問題に关心をもっていたが、ウィーンでは、マサリクに従いながら、『新約聖書』の研究に没頭した。そして、1886年4月26日にはウィーンのプロテスタント共同体の洗礼を受けるにいたったのである。当時ドイツでは、プロテスタンティズムへの改宗は、宗教的には幾分あいまいな態度が見られるが、オーストリアでは事情が異なっている。ウィーンのプロテスタントは少数で、この宗教への改宗は決して通常受け入れられている生活様式を単純には適用することはできない。事実マサリクもまた、ウィーンにおいてではないが、カトリックからプロテスタントに改宗している。それは、フッサーより6年早い1880年のことである。マサリクの改宗は、妻シャーロットの影響があつてのことであるが、マサリク自身は、硬直した教会の教義ではなく、人間が市民生活を営む上でかけがえのない要素がプロテスタンティズムにはあると考えたからである。このようにブレンターノの哲学とプロテスタンティズムを共有する両者には如何なる思想的関係があるのであろうか。既にみてきたようにフッサーは、哲学、宗教の助言ではマサリクに従っており、マサリク自身はフッサーに理性の危機意識を幾分伝えていた可能性があるように思える。

本稿は以上のこと踏まえてマサリクとフッサーに跨る思想的関係を精神的側面を中心にして論及することにしたい。その場合手がかりとなるのがマサリクとフッサーから直接大きな影響を受けた現象学者パトチカの『マサリクとフッサーのヨーロッパ的人間性の精神的危機』(1936年)という論考である。<sup>5)</sup> 題名を見てもわかるようにパトチカのこの論考で興味深いのは、立場の全く異なる両者を〈精神的側面〉を中心にして比較している点である。以下、①両者の精神的危機なし実証主義批判、②主観主義と客観主義の対置、③そして現代の危機の克服への道程と検討してゆくこととする。

## II. マサリクとフッサーの〈精神的〉危機

パトチカは、マサリクとフッサーの思想の共通性を〈精神的危機〉という問題から説きおこしている。マサリクにとって感じ取ることのできるその危機の形跡というものは、マサリク

の教授資格申請論文『現代文明の社会的大量現象としての自殺』(1881年) のなかにあらわれている。<sup>6)</sup> この論文は、デュルケムの『自殺論』(1897年) に先立つもので、デュルケムの『自殺論』にも影響を与えたと言われている。マサリクは、その後『現代人と宗教』(1896-8年)、『世界革命』(1925年)、『ロシアとヨーロッパ』(全3巻)、『具体的論理学』(1877年) など多数の著作を残している。

マサリクの考えでは、自殺が劇的に上昇する割合は、単純な事実ではなく徵候なのである。19世紀は進歩の時代であった。中世のカトリシズムが与えていた統一的世界観が新しい科学的な世界観によって揺るがされ、統一的世界観、人生観が失われていった。科学的な世界観によって人間は精神的・道徳的な諸価値を喪失し、宗教への信頼も揺らいでいったのである。マサリクは、文明の発展と共に自殺への傾向が生じ、とりわけ、近代以降の自殺は、宗教性の喪失にその原因があると捉えている。

マサリクのいうこうした〈精神的危機〉の徵候は、確かに、診断の出発点であるが、マサリク自身は、彼の著作において医学的な類推法を好んで用いている。マサリクによれば、自殺への傾向は、現在の社会状態の構成要素を純粹に客観的に分析することによってではなく、社会的条件と社会的情動において示される全体の内面的な精神的生活状態の分析、例えば、特定の政治的条件、経済的条件の分析によってのみ発見できるという。<sup>7)</sup> マサリクは、また、コントの歴史哲学の法則を認めている。マサリクの社会学と哲学は、個人と社会についての思想および信仰の現実的影響力の可能性といったものを主に研究対象にしている。コントはマサリクに深い影響を与えたが、こうした影響は、純粹に知的方向を辿っていたのである。

周知のように、コントは、実証的段階への移行の成り行きとして〈精神的危機〉の風潮を解釈している。マサリクが、伝統的宗教的な観点と新しい宗教的観点の対立として問題を捉えている限り、彼は、コントに同意しているのは明らかである。しかし、マサリクは、コントの宗教の考え方とその哲学と科学への関連を避け、自然科学的な考え方を保持している。また彼自身は、コントがデカルトとベーコンから意識的に引き継いだ合理主義というものからも距離をおいているのである。こういった合理主義は、実際マサリクとフッサー双方にとって問題を含んだものである。

他方、フッサーの方もまた、彼の哲学的な活動のはじまりから危機の現象に直面している。<sup>8)</sup> フッサーによれば、19世紀の後半には、近代人の世界観は、もっぱら実証科学によって徹底的に規定され、真の人間性にとって決定的な意味をもつ問題から無関心に眼をそらすことを意味していた。ルネサンスの高邁な精神によって満たされた、祝福されていた新しい人間性が、長くもちこたえることができなかったのは、みずからの理想とする普遍的哲学と新しい方法の有効性に対する生き生きとした信頼を喪失したということにほかならないからなのである。要するに、危機に対するフッサーの解答は、根本的な理論の精神から離れてヨーロッパを創建するということなのである。そしてヨーロッパ的精神は、マックス・ヴェーバーの指摘を待つまでもなく、あらゆる思想の偉大な合理者になっていたのである。

フッサーにとっては、自然科学を模範にした実験心理学の研究方法は、コントの実証主義の基礎となっているまさに客観主義的な形而上学であり、それは、マサリクが学術的な経験の

はじめに遭遇したものである。マサリクにとって、生活が途絶することは危機の徵候であり、道徳的統計値を分析することが診断する手段なのである。一方、フッサーは、諸科学の基礎における明瞭性の欠落のなかに危機をよみとっている。

「すでに数世紀にわたって心理学を悩ましている問題性—心理学に特有の〈危機〉—こそが、数学をも含んだ近代科学の解きがたい謎を含んだ不明瞭さ、そしてそれに関連して、以前には思いもよばなかったような種類の世界の謎が生じてきたことに対して中心的な意味をもっている。これらすべての謎は、まさしく主觀性の謎に帰着し、したがって、心理学の主題設定と方法との謎に分かちがたく関連している<sup>9)</sup>」。こうしてフッサーは、諸科学の危機を「ヨーロッパ的人間の根本的な生活の危機」、その全実存の危機の表現とみて独自の超越論的現象学をこの危機の克服の手段と考えるのである。

パトチカによれば、フッサーは、「彼の経歴のはじめに遭遇した両義性から離れた、唯一、ひとつの根本的な方法があり、それは即ち、主觀主義である、ということを確信するようになった<sup>10)</sup>」のである。両義性から免れた首尾一貫した哲学は、フッサーにとって、首尾一貫した主觀主義なのである。この点で、フッサーは、〈精神的危機〉のまさに源泉のなかに立っているとみるとみることができる。

「フッサーにとっても、近代の主觀主義は、哲学が想定したものであり、現在、困惑している主觀的立場から生じたものなのである…主觀という近代の発見をどう扱うか、ということについての戸惑いは、ヒュームのような不吉な主觀主義から生まれたという事実において、フッサーとマサリク双方にとって、精神的危機の基礎的な前提である。—実証主義の出発点は、自然主義的な基礎を用いた主觀主義なのである<sup>11)</sup>」

デカルトを通してこの細道は、根本的な主觀主義へか、あるいはギリシア形而上学に根づき、有名なキリスト教の神学によって明瞭に表現された伝統的な客觀主義の世界観というものへかの、どちらかに導かれるのである。

### III. 主觀主義と客觀主義の対置

我々は、マサリクとフッサーが〈精神的危機〉という近代社会の危機意識を共有していることを確認してきたが、次に考察されるべき点は、〈主觀主義〉と〈客觀主義〉をどのように理解していたかということである。ここで、今一度、近代哲学の主觀主義の父デカルトにまで溯ってみよう。「デカルトの接近方法において、フッサーは、不吉なヒューム的な主觀主義とは何か全く異なるものになっている根本的な主觀主義という考え方の前にたじろがないのである。フッサーは、還元の過程の厳密な適用をすることによって超越論的哲学を復興させ、超越論的主觀性と経験的主觀性をはっきり峻別し、主觀主義の問題を解決している。反対に、マサリクは、主觀主義の実証的な意義の可能性にほとんどまったく気づいていないように思われる。マサリクは、ヒューム的な議論およびカントの先駆的哲学を憤然として批判し、主觀と客觀の関係についての二元論、どちらかといえばデカルトの回想録で満足して終わっているのである。マサリクの〈稳健な理性主義〉とは、魂の教理、唯心論を相ともなっている<sup>12)</sup>」。

マサリク、かく語る。「デカルトは、cogito ergo sum を用いて我々、近代学者をすっかり混乱させたのである。デカルトの思考全てに対して、カントはもはや思考の周囲を迂回して戸惑っているのである<sup>13)</sup>」。

パトチカによれば、マサリクにとっての主観－客観関係は、フッサーの文脈における人間関係の主観－客観関係に一致しているかのようにさえ思える。<sup>14)</sup> マサリクは、カントの『純粹理性批判』ないし『実践理性批判』のいずれかにおいてヒュームを克服しえなかつたと主張することでカントに対する異議を唱えている。「カントは、神話的啓示から批判的・科学的経験主義へ移行する過渡期の典型的な代表者です。彼は2つの椅子－神学のそれと哲学のそれ－に座っていましたが、まさにその中途半端さによって影響を獲得したのです。彼は、自分の「物自体」という形而上学的トリックによって、極度にナンセンスな主観主義－唯我論－を逃れました<sup>15)</sup>」すなわち、カントは、ヒュームの数学の学説をあらゆる知識に拡大していったが、マサリクはカントの基本的な批判の考え方、まさしく主観的に方向づけられた形而上学の考え方というものに折り合わなかつたのである。マサリクにとっては、カントは、まさに懷疑論者である。

しかしながらマサリクの議論全体が示していることは、マサリクの哲学解釈が、幾分、楽観的で、批判を正面から真剣に受け止めようとしないということである。マサリク自身は、哲学的カテゴリーをほとんど使用しておらず、マサリクが主張する主観主義では、「客観的世界」を説明することはできないのではないだろうか。

マサリクにとっての「客観的世界」とは、意味的に秩序づけられたものとして現実を深く認識することによって、世界の存在が、純粹で実践的な努力の過程において理解できるというものである。それは、主観性の構造への内部の転換や急激な探求ではなく、反対に我々の主観性にある自己中心的な先入観の自由を打ち碎くことであり、自己超越論的な行為においてその世界を善、真理、正義へと前進していくことである。

事実上、マサリクが客観主義について語る時、フッサーが『危機書』において超越論的主観性によって構成された共同の生活世界として結論づけた生きられた経験、意味づけ、そして価値蓄積といった道徳的に秩序づけられた世界を意味している。しかしながら、フッサーにとっては、生活世界は、超越論的エポケーを精密に適用し、超越論的主観的経験に対して現象学的還元によって純粹化された残余からのみ再発見されるのである。コハーケによれば、フッサーは、『イデーン1巻』において、「厳密な学としての哲学」の概念を用いた初期フッサー現象学の生きられた現実の直観構造をはっきりと表現しており、実際に感覚的経験の実証主義というより直観的な洞察の実証主義が描写されているように思える。<sup>16)</sup> そしてここにフッサーの「主観性」とマサリクの「客観性」との間の親密性を読み取ることができる。

フッサーは、専門的な哲学の形式的な言い回しを取り入れている一方、マサリクは通俗的な社会的用語を用いており、主観主義に対して明確な定義はなされていないが、マサリクの場合には、近代人は、自分のつくった理論と関心にのみ閉じ込められ、もはや、生きられた現実はみられないで「主観性は病である」という結論へと導びかれていくのである。マサリクは真理と客観性のメタファーを転換する一方、フッサーは、主観的な経験において志向性を基

礎づけることによって客観性に意味を与えようとしたのである。また、「現実の頑なさ」といった、その他の還元できないものを十分認識することができなくなっていることから、パトチカはフッサーの主観主義的な立場からマサリクの客観主義を批判したのである。

#### IV. 現代人の危機とその克服への道程

さて、我々は、フッサーとマサリクの〈精神的危機〉の根源が主観主義にあり、それは、カント、ヒュームらの難解な懷疑論に陥ることに原因があることを確認してきた。パトチカによれば、そういう主観主義は宗教性の喪失に繋がるとされている。この点について検討してみよう。

まず、宗教の本質についての彼らの見解をみてみることにしよう。パトチカによれば、フッサーは、この点において、両義的な見解を公表しており、宗教概念については定かではないが、パトチカ自身が述べているようにフッサー自身は信仰の独立した明証性を容認している。<sup>17)</sup> パトチカによれば、フッサーは、明証性の特殊な性質として、キリスト教会が信仰を呼びかけている事実を論理化して成果を見つけ出しているのだという。キリスト教以前の神々は、原初的に、難なく、論証されることなしに、我々を取り囲んでいる現実の構成要素として現れる。そしてキリスト教徒における信仰の問題は、哲学の発展と影響をともなって可能にしたのである。フッサーによれば、宗教の発展は、哲学的な概念それ自体を導くことであり、常にその発展の内に痛烈に感じるものなのである。しかしながらフッサーは、宗教に対する哲学的な動機が、もっぱら感情的で概念的には不十分な説明であり、パトチカに言わせれば、フッサーの宗教概念はひとつの「効果的な理想主義」なのである。

フッサーが生涯を通して執着したこの一般的な宗教の概念はウイーン時代にマサリクによって教え込まれたことは間違いない。実際、フッサーはプロテstantへの改宗にあたりマサリクの実例に従っている。フッサーにとって「キリスト教の直観」は、ヨーロッパ文明の最も高い構成物のなかにあった。フッサーにとって、宗教の問題は、少なくとも単独個人に関係しているが、幾分、相互主観性に関係している。

「…相互主観性は、客観的世界を相互主観的に構成する。こうして相互主観性は、先駆的なわれわれとして、その客観的世界に対する主観性であるが、それと同時に、相互主観性は、それが自己自身を客観的に現実化したいの形式である人間世界に対する主観でもある<sup>18)</sup>」。

フッサーが初期の時代にいつ「神の存在の証明」(1892/93冬)ないしは「有神論と近代科学」(1893/94冬)といった講義を行ったかは定かではない。しかしながら、我々がフッサーの『デカルト的省察』を読むとき、デカルトがそうであったように、フッサーは、神の概念を合理的に分析し、説明したのではないかといった確信も残る。おそらく、フッサー自身は、宗教概念の説明なしには現象学を発展し得なかつたであろう。

他方、マサリクにとっては、宗教は、原始的に信頼を感じとることであり、世界、および職業に愛を投じることなのである。

「我々は、外部の世界および外部の社会に関心を持たなければならない。我々は献身という

ものを学ばなければならない。我々に欠けていることは、本当に偽りのない崇高な愛なのである<sup>19)</sup>。あるいはまた、カレル・チャペックの『マサリクとの対話』の最後の部分で「宗教は、実践的なものであり、深い意味で生活に関わる。宗教は、その教理や儀礼や歴史によっては十分に定義されない。宗教は、その本質を理解することによって定義されるのであり、その本質とは、神性と神に対する人間の依存性の意識である。…宗教は、信頼と希望であり、希望は宗教の本質だからである。…生全体の意味の理解であるばかりではなく、同時に、その生と世界に由来する気持ちもある。…宗教、敬虔さは、純粋に人間的な事柄であり、神は敬虔ではない…<sup>20)</sup>」。あるいはまた「私の信仰、それはイエス主義、隣人愛、活動的な愛、神への崇敬です。宗教は希望であり、恐怖に、特に死の恐怖に打ち勝ちます。絶えず高みへ、ますます高いところへと人を働き動かし、認識と知恵に対する希求を培い、恐れを知りません。<sup>21)</sup>」「宗教は、本質的に権威に基づくものなので客観主義的である。有神論は、極端な宗教的主觀主義に対立する。<sup>22)</sup>」。要するに、マサリクにとって、宗教は、あらゆるものとの関係において体験している意欲的な生活を支えるものなのである。宗教的な客観主義においては、神は全知全能であり、世界の創造者は、我々を気づかっている、というのである。

パトチカによれば、マサリクの宗教概念において、我々は、客観的要素と主觀的要素をはっきり区別することが必要なのだという。主觀的な要素は、信徒の活動を支える楽観的なものであり、客觀的な要素は、神と世界の本質についての神学的な考え方である。神は、独立した知能をもった絶対的権力者としてこの世界を大きく超越している。フッサーはマサリクの主觀的な要素を受け入れたかもしれないが、神学の客観主義的な考え方を単純には受け入れたとは思われない。フッサーにとっては、絶対者は、むしろ現象学的還元の対象である。パトチカは、マサリクの忠実な弟子エマニュエル・ラーデルの功績を跡づけ、これらの構成要素は、マサリクの哲学概念を客観的に結びついているのではなく、マサリクの個性によって保持されていることを力説する。そして、パトチカは、マサリクの哲学を断じて打ち勝てない「危機の哲学」と名づけている。

「マサリクとフッサーは、深刻な危機の徵候として実証主義者が考へている自然科学的な方法論を実体化することに同意しないばかりではなく、近代の非宗教的なものを近代思想、近代哲学に帰着させることにも、また、危機の状態の徵候としてのこうした非宗教的なものと考えられることにも同意しないのである。マサリクは、自殺の傾向で危機の徵候を分析し、またフッサーも、根本的な形而上学の謎を隠喩によって把握するものとして宗教の概念でこうしたことを確認している。宗教の衰退は、普遍的な意識においては、究極的な使命および哲学の可能性の自覺の衰退ということを伴っているのである<sup>23)</sup>」。フッサーとマサリクが、「非宗教的なもの」に同意しない点で、両者の危機の概念の共通点を見出すことができる。

しかしながら、正確には、我々にマサリクの哲学が深刻に提示しているのは、信仰の問題である。パトチカの見るところ確かにフッサーは、信仰の問題を理解していない。「宗教の信仰は、単なる通俗的な形而上学であるはずがない。絶対的信頼という意味での信仰は、理論的な立場ではなく、むしろ実践的な立場であり、理論から生じたあるいは議論に基づいた個人の決断力の問題ではない。むしろ、信仰はそうした理論ないしは議論に導き、特定の世界観全体

のなかで問題自体を詳細に説明するのである<sup>24)</sup>」。

マサリクが繰り返して強調していたことは、プロテstantt信仰は、批判的であらねばならないということである。そして、マサリクのそのような批判的な態度は、偽りの神学的な観念論から我々自身を解放し、そして、精力的に主観的な立場に信仰の問題をおくことを必要としているのである。今日のフッサーの哲学は、恐らく、そうした答えに基づく根拠としては有用ではあるが、こうした個人的な問題に答えたり、人間存在の問題に正面から取り組むものではないのである。フッサー哲学とマサリク哲学の対立から生じた問題は、根本的な主観主義の文脈における個人の信仰の問題である。さらにこうした問題を処理することなしに、我々は、〈精神的危機〉の問題を解決することができない。またヨーロッパ文化の目的論的な考え方には依存することもできない。むしろ、我々自身、理想的な美德というものを積極的に理解することに努めることが必要であり、理想的な美德をもって、我々が生活できるということを我々自身確信できるのである。しかしながら、信仰を決意することは、容易なことではない。意欲的な生活および思索的な生活といった崇高な模範から引き出せる情熱というものを必要としている。そして我々は、こうした崇高なものへの傾きから生じる情熱をもって、現代の危機を乗り越えることができるのである。

## V. 結語

以上みてきたようにマサリクにとっての「危機の徵候」とは「自殺の傾向」である。マサリクが分析したものは、「非宗教的なもの」へ陥っていく傾向であった。こうした「非宗教的なもの」は一体何を引き起こすのであろうか。こうした傾向は、主観主義から生じた近代の懷疑論に他ならないのである。懷疑論は、客観的世界に到達することの難しさから生じており、それゆえ、哲学は主観主義的な立場へ移行したのである。フッサーにあっても、近代の主観主義は、哲学が想定したものであり、困惑している主観的立場から生じたものなのである。この点で、マサリクはフッサーに一致している。近代の主観主義はそれゆえ〈精神的危機〉の根源なのである。マサリクの『現代人と宗教』とフッサーの『危機書』が、懷疑論に陥っていく様子を描いているのは決して偶然ではない。そして、パトチカの哲学は、コハーケが指摘しているように、マサリクの客観主義とフッサーの主観主義の弁証法的な統合の形態をとっていると見ることができる。<sup>25)</sup>

しかしながら、マサリクと後期フッサーの現象学には明確な違いがある。マサリクにとっては、意味づけと価値は実際に客観的で、本質的に神に関係がある秩序づけられた世界を意味するものである。マサリクは、しばしば永遠の世界(sub specie aeternitatis)といった概念でこれを説明しようとする。それは、唯一偶然に主観と関係がある世界である。フッサーにとっては、意味づけは、本質的に主観に関係がある。フッサーの「生活世界」(Lebenswelt)の概念を彼の思想の中心に移した時、単純に与えられた客観的なものとしてではなく、意味づけとして主観性によって構成された相互主観性(Intersubjectivität)の世界である。フッサーが、強烈に力強く退けた相対主義は、個人的心理学的な主観によって構成されたものとしての世界の考え方なの

であった。心理学主義は、マサリクが、危機の根源として見做していた主觀主義と明確に類似している。しかしながらマサリクとは異なり、フッサーは、主觀性に、客觀性ではなく、超越論的主觀性を対置させている。そしてパトチカ自身は、出發点としてフッサーの選択を選んだのである。

註)

1)

マサリクの再評価の動向は一般的に4つの時期(1918年, 1945年, 1968年, 1989年)に分けることができる。最初の動向はオーストリア=ハンガリー帝国のなかにあるチェコ民族を解放しようとした時である。ナチス・ドイツの占領期間および第2次大戦の間ではチェコは、國家の地位を喪失したが、コミュニストを含んだナチス・ドイツに反対する抵抗運動の指導者たちを一つの関心へと導いていった点で、マサリクは新しい共和国の新たな始まりを求める価値観を代表していた。

1968年、8月のソビエト軍隊の干渉、全体主義体制の復活の後、マサリクについての研究は、主に亡命者のなかで扱われ、マサリクの著者は地下出版された。マサリクが批判されればされるほど反対派のなかで、「憲章77」についてや、マサリクや亡命知識人についての議論が起こった。1980年代の中頃にはマサリクの名前は、記念祭、式典においてますます頻繁にみられるようになった。

1989年11月17日はマサリクが幅広く民族意識において復活した時で、マサリク再評価の動向は頂点に達した。それはまた、社会主義の改良のみならず全体主義の社会を完全に廃止して徹底的な政治的経済的民主主義を創立するための運動であった。

拙論「ブルノからの通信」「労働運動研究」第337号1997年参照。

2)

1936年8月21日にフッサーがF. ヤンツィーク宛てた手紙。

当時、ヤンツィークは、フッサーの故郷プロスニツで、歴史政治科学クラブの書記をしていた。原文は破損しており、手紙のチェコ語翻訳版は、*Kulturní 2práva* 4 (1938) に所収されている。また、手紙の一部は、英訳されており、ヤンツィークのサイン入りでフッサー文書館に保存されている。

cf. K. Schuhmann : "Husserl and Masaryk" On Masaryk edited by Josef Novák (Amsterdam 1988), p.132. 以下：HaMと略記。

3)

K. シューマン編の書簡集には、マサリクーフッサーの往復14通もの手紙が所収されている。その内、マサリクからフッサーへは、8通、フッサーからマサリクへは6通。両者の親しい間柄が書簡からもよくわかる。

K. Schuhmann : E. Husserl Briefwechsel - Die Brentanoschule (Dordrecht/Boston/London, Kluwer Academic Publishers, 1994), S.97-120.

cf. K. Schuhmann : Husserl Chronik - Denk und Lebensweg Husserls (Haag, Martinus Nijhoff, 1977), S.15f.

4)

*Česká mysl* 25(1929),str.189.

cf. K. Schuhmann:HaM,*op.cit.*,p.150.

5)

ヤン・パトチカは、マサリクと並んで20世紀チェコ哲学を代表する思想家のひとりである。

パトチカは、フッサーおよびハイデッガーから大きな影響を受けた。パトチカはソルボンヌ留学中、彼の指導教授でもあったアレキサンダー・コレーを通してフッサーと知り合った。それはフッサーが後に「デカルト的省察」になっていく有名なパリ講演を行った1929年2月のことであった。その後、パトチカとフッサーは親しい哲学的交友関係が続いた。例えば、フライブルクのフッサーを集中的に訪問したり、フェンボルト財団の助成金を得てともに研究しようとしたことなどが書簡からわかる。

K.Schuhmann:*E.Husserl Briefwechsel -Die Freiburger Schüler* (Dordrecht/Boston/London,

Kluwer Academic Publishers,1994),S.425-436.

回想録によれば、当時フッサー邸を訪れていたパトチカは、クリスマス・イブにフッサーから特別な贈物をもらったという。それは、マサリクがライプツィヒを去るとき、哲学に興味をもった若き數学者に残したものであり、フッサーは、この思い出の品を60年近くも大切にもっていたのである。パトチカは「そして、私は伝統の継承者になった」と語っている。

J. Patočka : "Erinnerungen an Husserl" *Die Welt des Menschen -die Welt der Philosophie*:Festschrift für Jan Patočka edited by W. Biemel (Haag, Martinus Nijhoff,1976),S.xv.

後期パトチカは、現在大統領であるハヴェルや、歴史家ハーエイエクとともに「憲章77」の最初の起草者となった。パトチカの代表作としては『哲学的問題としての自然的世界』(1936年)『歴史哲学に関する異端のエッセイ』(1975年)などがある。

パトチカのテキストは、以下のものを使用し、MHKと略記。

また、頁数は、チェコ語、英語、独語の順とする。

J. Patočka : "Masarykovo a Husserlovo pojetí duševní krise evropského lidstva" *Kwart* 3(1936).č.2, str.91-102.

J. Patočka : "Masaryk's and Husserl's Conception of the Spiritual Crisis of European Humanity" *Philosophy and Selected Writings* translated and edited by E.Kohák (University of Chicago Press,1989), pp.145-155.

J. Patočka : "Masarkys und Husserls Auffassung der geistigen Krise der europäischen Menschheit" *Die Bewegung der menschlichen Existenz* translated and edited by K.Nellen, J.Němec, I.Šrubař (Stuttgart, Klett-Cotta,1991),S.455-469.

- 6) T.G.Masaryk: *Der Selbstmord als sociale Massenerscheinung der modernen Civilisation* (München/Wien, Philosophia Verlag, 1982). 以下: DMCと略記。
- 7) Ebend, S. V. VIII, 231.
- 8) E.Husserl: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie* (Bd.VI, Haag, Martinus Nijhoff, 1962), S.3-8.  
(細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』  
中央公論社 1974年16-23頁参照) 以下: 『危機書』と略記。
- 9) Ebenda, S.3.(同書16頁)
- 10) J. Patočka: MHK, *op.cit.*, str.94. (p.148, S.459)
- 11) *ibid.*, str.97-8. (p.151, S.464)
- 12) *ibid.*, str.98. (p.152., S.464-5)
- 13) T.G.Masaryk: *Modern Man and Religion* translated by A.Bibza, Dr. V. Benes (London, George Allen & Unwin LTD, 1938). P.90 以下: MMRと略記。  
*cf.* J. Patočka : MHK, *op.cit.*, str.99. (p.152., S.465)
- 14) 例えば  
T.G.Masaryk : MMR, *op.cit.*, pp.196-212.
- 15) K. Čapek : *Hovory s T.G.Masarykem* (Praha, 1990), str.234.  
(K. チャペック『マサリクとの対話—哲人大統領の生涯と思想』  
石川達夫訳 成文社 1993年195頁) 参照。
- 16) E.Kohák: *Pan Patočka Philosophy and Selected Writings* (University of Chicago Press, 1989) p.15.
- 17) J. Patočka : MHK, *op.cit.*, str.95. (p.149., S.461)
- 18) E.Husserl: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge* (Bd.I, Haag, Martinus Nijhoff, 1950), S.137.  
(細谷恒夫訳「デカルトの省察」『世界の名著』51所収 中央公論社 1970年 295頁)

19)

T.G.Masaryk:DMC,*op.cit.* str.232.

20)

K.Čapek: *Hovory s T.G.Masarykem*, *op.cit.*,str.259. (前掲217頁)

21)

*ibid.*,str.269. (同書224頁)

22)

*ibid.*, str.257. (同書216頁)

23)

J. Patočka:MHK, *op.cit.*, str.95. (p.149.,S.460-1)

24)

*ibid.*, str.101. (p.155.,S.469)

25)

E.Kohák: *op.cit.*,p.13.

### 【参考文献】

J.Bloss, W.Stróżewski, J. Zumr: *Intentionalität Werte Kunst-Husserl Ingarden Patočka* (Praha, Filosofia,1995).

E.Kohák : *Pan Patočka - Filozofický Životopis* (Praha, Nakladatelství a Vydavatelství H&H,1993)

E.Kohák : *Pan Patočka Philosophy and Selected Writings*

(University of Chicago Press,1989)

L.Nový, J.Zouhar,J.Šmajš,J.Hroch : *Česká filozofie ve 20.století*(Brno,1995)

L.Nový, J. Gabriel, J.Hroch : *Czech philosophy in the 20th Century*

(Washington,D.C, Paideia Press & The Council for

Research in Values and Philosophy,1994)

J.Zumr, T.Binder : *T.G.Masaryk und die Brentano-Schule*

(Praha,Filozofický ústav Ceskoslovenské akademie věd,1992)

O.Funda:*T.G.Masaryk-Sein philosophisches,religiöses und politisches Denken*(Bern,Verlag Peter Lang AG,1978)

T.G.Masaryk: *Bibliografie k životu a dílu 1* (Praha, Filozofický ústav ČSAV,1992)

T.G.Masaryk: *Bibliografie k životu a dílu 2* (Praha, Filozofický ústav AV ČR,1994)

J. Patočka: *Bibliografie 1928-1996* (Praha,Archiv Jana Patočky,1997)

石川 達夫『マサリクとチェコの精神

—アイデンティティと自律性を求めて』成文社 1995年

林 忠行『中欧の分裂と統合—マサリクとチェコスロバキア建国』中公新書 1993年

田島 節夫『フッサー』 講談社学術文庫 1996年